




植樹式 1998



時の蘇生・柿の木プロジェクト

目次

2020年更新

3月28日		防災広場初音の森（谷中コミュニティ センターから移植）日本・東京都・台東区	1
4月18日		WHO 本部 スイス・ジュネーブ	2
4月20日		ストラスブール国立高等装飾美術学校 （現在は HEAR ストラスブール統合） フランス・ストラスブール	3

防災広場初音の森 (谷中コミュニティセンターから移植)

🇯🇵 日本
📍 東京都・台東区
🌱 1998年3月28日



谷中は古くからの町並みが大切に残され、昔ながらの人と人との交流が今も息づいている町です。1997年秋に地元のギャラリーCASAで「柿の木プロジェクト活動報告展」が開催されたのをきっかけに「谷中柿の木ネット」を中心として植樹への取り組みが始まりました。展示やワークショップなどを通して次第に柿の木への共感が広がり、放課後に地元の小学生が通うこどもクラブが併設され、地域のさまざまな年代の人々が集う谷中コミュニティセンターでの植樹が実現しました。

植樹式では谷中コミュニティ委員長の浅尾空人さん、谷中三崎町会長の野池孝三さんなど地元の方々、海老沼先生、宮島達男からスピーチがあり、苗木贈呈式が行われました。式典に続き、アーティストの花田ハイケさんとこどもたちを中心に、東京藝術大学の学生が協力して長崎の伝統的な行事「おくんち」を題材に“被爆柿の木2世”の蘇生といのちのエネルギーを表現したパフォーマンスが行われました。小さなこどもたちはピアノのメロディーにのせて、柿の木をぐるりと囲んだ布に水彩で絵を描き、大きなこどもたちは大正琴の躍動感あるリズムとともに龍を操りました。植樹後は、柿の木の前でこどもたちの大好きなお餅つきが行われ、美味しいきなこあんこのお餅をいただきました。



2002年秋には柿の木が早々とたわわな実をつけたので、コミュニティ委員会

の「こども未来部」が初めての収穫祭を開催しました。こどもたちと一緒に干し柿作りをして「被爆柿の木2世」とこどもたちの成長を祝い、その後も毎年のように収穫祭が行われています。

2008年3月、柿の木は谷中コミュニティセンターの建て替え計画に伴い、お向かいの防災センター広場へ移植され、この広場に集う地域の人々に見守られています。

2014年3月、柿の木の元気がなくなり、樹木医の小池仲男先生によって治療が行われました。この時に新たに、もう一本の「被爆柿の木2世」も植樹されました。谷中防災コミュニティセンターのこどもたちも参加してくれました。治療を受けた柿の木も、その後は元気に成長しています。

2018年11月8日、20周年を迎えた柿の木の収穫祭が行われました。谷中コミュニティ委員会こども未来部、谷中児童館の呼びかけで幼児から小学6年生、そして保護者の方たち約26名が参加して、干し柿作りとワークショップを楽しみました。ワークショップでは児童館の先生が紙芝居「かきのきおやこ」を上演し、こどもたちに被爆柿の木2世の物語を分かりやすく披露しました。また、柿の木プロジェクト実行委員からは、春にイタリア、ロンバルディア州ブレーシア県の植樹地の方々が谷中を訪問したことをこどもたちにお知らせしました。ブレーシアのこどもたちが描いた原爆のきのご雲が平和な木に変身した塗り絵などを紹介し、柿の木のきょうだいが世界に広がっていることを伝えました。そして、来年もまた実がなるようにとの願いを込めて、柿の実の折り紙を沢山作りました。

WHO 本部

🇨🇭 スイス

👤 ジュネーブ

🌱 1998年4月18日



スイス・ジュネーブにある国連の専門機関・世界保健機構（WHO）の記念イベントとして、1998年4月～1999年にかけて国際美術展「意識の先端」展が開催されました。そのオープニングに先駆けて、1998年4月18日、WHO本部前庭に「被爆柿の木2世」が植えられました。この植樹は柿の木プロジェクトが、この展覧会で里親募集を兼ねる展示を出品していたことをきっかけに、展覧会の企画者であったアデリーナ・フォン・フルステンベルクさんを中心に実現したものです。




植樹式では、海老沼先生、海老沼仁美さん、WHOのクライセルさん（保険衛生・環境担当部長）によるスピーチに続き、長崎知事、長崎市長のメッセージも紹介され、長崎市長から「平和の鐘」が贈られました。苗木は集まってくれたジュネーブの子どもたちがそれぞれの手にスコップを持って植えてくれました。植樹の後、アデリー

ナさんの呼びかけでイタリアから駆け付けてくれたアメリカ人バイオリニスト、マイケル・ガラツンさんが「柿の木のためのオリジナル曲」（作曲：同氏）をバイオリンで演奏してくれました。繰り返されるメロディが美しく、変化していくこの曲は、参加した多くの人の心に強く残りました。

展覧会期間中は、前庭に植樹された柿の木の後ろに「柿の木ボード」が設置され、美術展に参加したアーティストや美術関係者、ジュネーブ市民によって自由にメッセージが書き込まれ、大勢の参加で白いボードが真っ黒になりました。

同展は、この後1998年9月アメリカ・ニューヨーク国連本部、1998年12月ブラジル・サンパウロ、1999年3月インド・ニューデリーと巡回し、柿の木プロジェクトの里親募集の活動も同時に行われました。

ストラスブール国立美術学校 (現在は HEAR ストラスブールに統合)

 フランス
 ストラスブール
 1998年4月20日

海外植樹申し込み第1号として「被爆柿の木2世」が長崎からフランス・ストラスブールに渡りました。きっかけになったのは、1996年4月、フランスのカルティエ美術財団で開催された宮島達男の展覧会です。オープニングパーティーで宮島は、カトリーヌ・グルーさん（美術史家）に出会い、進行中の柿の木プロジェクトについて話しました。以前から都市と自然に関するさまざまなアートプロジェクトに参加してきたグルーさんは、宮島の話に非常に関心を持ちました。2人は核戦争、核実験、そしてアートに関していろいろと貴重な意見交換をして、後日グルーさんから宮島はあるプロジェクトを紹介されま

した。それはグルーさんが企画しているストラスブールにおけるアーバンデザインのプロジェクト（1997年6月）でした。宮島と柿の木プロジェクト実行委員会とで話し合った結果、グルーさんのプロジェクトがストラスブール市の職員、日本領事館、ヨーロッパ領事館関係者に紹介されたところ、予想以上の反響がありました。しかし結局このグルーさんのプロジェクトでは、

苗木を植樹できませんでした。

その後、ストラスブールでの植樹に結びつくまでには、たくさんの人たちが関わってくれました。この苗木のことをグルーさんから聞いたストラスブール在住のアーティスト、ミッシェル・クリーガーさんは「戦争中もドイツとの国境だったために戦火の中心となったストラスブールに“被爆柿の木2世”を！」という熱心な呼びかけ

を行ってくれました。そのミッシェルさんの熱意は街全体に広がっていき、結果、市や植樹先となった美術学校の人々を動かしました。

1998年4月20日の植樹の当日、ス

トラスブールを訪れた実行委員会のメンバーは街中の人たちから歓迎を受け、この苗木のために動いてくれた人たちの力を感じました。

1998年4月20日の植樹の当日、ストラスブールを訪れた実行委員会のメンバーは街中の人たちから歓迎を受け、この苗木のために動いてくれた人たちの力を感じました。

